一向一揆ゆかりの地を訪ねる
一向一揆紀行

第１８回
金ヶ崎城
（福井県敦賀市金ケ崎町）

鳥越一向一揆歴史館友の会／北陸城郭プロジェクト　塩谷忠士

友の会の世話人をしております塩谷です。次は令和８年９月に研修旅行で行った敦賀市の金ヶ崎城を紹介します。当日は地元ガイドの案内で城跡を一回りしました。かつての金ヶ崎城は三方を海に囲まれた天然の要害で、東方の支城天筒山城から続く尾根筋が守りの要となります。東から一の木戸、二の木戸、三の木戸と主郭に近づくにつれて幅と深さが大きくなる堀切（尾根を断ち切って敵軍の進攻速度を鈍らせる防御施設）があり、一は金前寺、二は愛宕神社、三は金崎宮本殿へと南麓に竪堀が長く続いています。木戸（城戸）とは城郭の出入口に簡単な門を設けた施設のことで、金ヶ崎城に門のような建物が実際あったかは不明ですが、山麓から登る道のように感じました。


月見御殿跡（主郭）からの眺望

金ヶ崎城は延元元年（１３３６）北朝方の足利尊氏に対抗する南朝方の新田義貞が恒良親王と尊良親王を奉じて入城したものの翌年落城しました。尊良親王と新田義顕（義貞嫡男）は城兵３００名とともに城に火を放ち自害、恒良親王は捕縛されました。金崎宮はこの戦いに敗れた恒良親王を御祭神として明治２３年に創建され、同２５年に尊良親王が合祀されました。本殿背後の曲輪跡に「尊良親王御陵墓見込地」の石碑が建っていて親王が自刃した最後の地と考えられています。

元亀元年（１５７０）織田信長が天筒山城を１日で攻め落とし、翌日金ヶ崎城は降伏して開城しました。朝倉氏は支配する越前国内でも敦賀郡と大野郡には郡司を置き独自権限を持たせて統治していました。この時の敦賀郡司は朝倉景恒、家中では大野郡司の朝倉景鏡と席次を争っていましたが、降伏を非難されて永平寺に遁世し半年後に亡くなりました。信長は義弟の小谷城主浅井長政裏切りの報が入り、京に撤退しました。この「金ヶ崎の退き口」と呼ばれる撤退戦はＮＨＫ大河ドラマで戦国時代が扱われる度に描かれ、近年では「麒麟がくる」（２０２０）で明智光秀、「どうする家康」（２０２３）では徳川家康、本年の「豊臣兄弟！」では豊臣秀吉が殿となって活躍し、ゆかりの地として関連グッズが作成されています。元亀３年朝倉氏が滅びると、朝倉旧臣間の対立に乗じて一向一揆が勢力を広げて一国を支配するようになりました（越前一向一揆）が、朝倉氏滅亡の始まりがこの金ヶ崎城の戦いでした。

金ヶ崎城は昭和９年（１９３４）国史跡に指定されています。日本城郭協会選定の日本１００名城にも続日本１００名城にもなっていないことを地元ガイドは冗談交じりに嘆いていましたが、ゆかりの武将が戦国三英傑（信長・秀吉・家康）なんてうらやましい限りですね。

参考資料
敦賀市ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄ
「金ヶ崎城跡と
周辺の城跡ガイド」、
「金崎宮案内記」
ほか



令和８年の御城印は
秀吉・秀長ゆかりの地


三の木戸（金ヶ崎城最大の堀切）


二の木戸（二重堀切）